

Title	Factors affecting responses of children with autism spectrum disorder to Yes/No questions
Author(s)	船崎, 康広
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54707
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

〔 目 的 〕

「はい」または「いいえ」にて答える Yes/No 質問は、相手の意志を明確に把握するときに有効なコミュニケーションツールと考える。

ASD 児における Yes/No 質問の理解については、エコラリア研究の中においてみられ、高い認知的負荷がかかっているときに出現されるとされるエコラリアの出現 (Cahrlop, 1986) が Yes/No 質問の応答場面においてよりその頻度が高まるという報告 (Paccia and Curcio, 1982 など) がある一方、大人が HFASD 児の意図を明確にするときは Wh 質問より Yes/No 質問の方が適している (Oi, 2005) 等の報告がある。

果たして ASD 児は Yes/No 質問の理解が特異的に困難であるといえるのだろうか。そのような研究が少ないことに加えて、報告されているそれぞれの対象児は、研究によって知的レベルや障害の程度、年齢の範囲等に加えて、研究の目的や情報収集の状況、評価等が全く異なる。未だ ASD 児の Yes/No 質問に対する応答状況についての全体像は明らかになっていない。

そこで本研究では以下の 3 点について明らかにする。(1) ASD 児は「はい/いいえ」で答える質問に対して何歳で適切に答えられるようになるか。(2) ASD 児は「はい/いいえ」で答える質問に対して、問題を持っているのだろうか。(3) もし問題を持っている場合、そのことは知的レベル、言語能力レベル、ASD の重症度によって説明ができるのだろうか。

〔 方法ならびに成績 〕

対象は 3:5 から 16:0 の 52 名の ASD 児である。それらの児に対し、Yes/No 質問の理解ができていのかどうかを把握するための検査 (Yes/No test) を考案し実施した。この検査は以下に説明する 2 種の Yes/No 質問に対する応答反応を調べるものである。

1 つは提示された絵について、「これは〇〇ですか？」の間に、「はい」または「いいえ」にて答える課題 (Naming true/false tasks) である。もう 1 つは欲しい物があるときに、提示されたものが自分の欲しい物かどうかを「はい」または「いいえ」にて答える課題 (Request-intention tasks) である。それぞれの課題は、使用する絵や物をどの子にも同じものにした場合 (standard) と子どもの興味や好みで異なるものにした場合 (individual) の 2 つの状況を設定した。

さらにこれらに加えて知的発達の指標として田中ビネー知能検査 V、言語理解能力の指標として PVT-R、ASD の重症度の指標として PARS を選択し実施した。

Yes/No test によって得られた子どもの反応は VTR 録画され、まずそれらの反応を 6 つのカテゴリーに分類した。次にそれらのうち、適切に反応であった場合のカテゴリーである Ordinary 反応 (Yes 反応ならば、「はい」と言う、頷くなど、No 反応ならば「いいえ」と言う、首を振るなどの明確な Yes/No 反応) についてのみ集計を行った。

【 3 】

氏 名	船 崎 康 広
博士の専攻分野の名称	博 士 (小児発達学)
学 位 記 番 号	第 2 5 7 5 9 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 25 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合 小児発達学研究科小児発達学専攻
学 位 論 文 名	Factors affecting responses of children with autism spectrum disorder to Yes/No questions (ASD 児における Yes/No 質問の応答に影響を及ぼす因子について)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 柴 和 弘 (副査) 教 授 棟 居 俊 夫 教 授 中 里 道 子

結果、名称正誤判断課題においては、知的に normal、mild の群が就学前には60%、就学後には90%以上の者が通過していたのに対し、moderate 群では就学後でも30%以下、severe 群に至っては1%以下であった。要求意図判断課題については、normal、mild の両群が就学前には90%以上、moderate 群では就学後で73%の者が通過していたのに対し、severe 群では就学後においても30%程度であった。

また多重ロジスティック回帰分析の結果では、Yes/No 質問における Ordinary 反応の関連因子として、名称正誤判断課題においては PARS の現在の状況を示した得点、精神年齢、語彙年齢が、要求意図判断課題においては IQ が導き出された。

[総 括]

ASD 児は「はい/いいえ」で答える質問に対して、就学前の場合、例えば知的に軽度または正常であっても、その理解に混乱を示していると考えられた。ただしこのレベルの ASD 児は、就学後には理解できるようになるが、知的に中度の ASD 児についてはその後も混乱している者がおり、重度に至っては、青年期に入っても理解が困難であることがわかった。

英語圏の定型発達児の Yes/No 質問の理解についての縦断的研究 (Steffensen, 1977) と比較すると、ASD 児はその理解について知的な遅れがなくとも明らかに遅れがあり、Yes/No 質問の応答に問題があると推定された。また同じ Yes/No 質問であっても聞く内容によって成績に差が出ることも定型発達児の先行研究との比較から ASD 特有の特徴として推測された。多重ロジスティック回帰分析の結果からは、Yes/No の質問に適切に応えるようになるための因子に、知的レベル、言語能力レベル、ASD の重症度のどの因子も関与しているがわかった。

論文審査の結果の要旨

本論文はASD児におけるYes/No質問に対する応答状況を調べることにより、Yes/No質問に対するASD児の理解の特異的困難性について、以下の3点について調べることにより、明らかにすることを目的として研究されたものである。(1)ASD児は「はい/いいえ」で答える質問に対して何歳で適切に答えられるようになるか。(2)ASD児は「はい/いいえ」で答える質問に対して、問題を持っているのだろうか。(3)もし問題を持っている場合、そのことは知的レベル、言語能力レベル、ASDの重症度によって説明ができるのだろうか。

方法は3歳5ヶ月～16歳までの52名のASD児を対象として、名称正誤判断課題と要求意図判断課題のYes/No 問題を考案し、実施した。

その結果、名称正誤判断課題においては、知的にnormal、mildの群が就学前には60%、就学後には90%以上の者が通過していたのに対し、moderate群では就学後でも30%以下、severe群に至っては1%以下であった。要求意図判断課題については、normal、mildの両群が就学前には90%以上、moderate群では就学後で73%の者が通過していたのに対し、severe群では就学後においても30%程度であった。

ASD児は「はい/いいえ」で答える質問に対して、就学前の場合、例えば知的に軽度または正常であっても、その理解に混乱を示していると考えられた。ただしこのレベルのASD児は、就学後には理解できるようになるが、知的に中度のASD児についてはその後も混乱している者がおり、重度に至っては、青年期に入っても理解が困難であることがわかった。

英語圏の定型発達児のYes/No質問の理解についての縦断的研究 (Steffensen, 1977) と比較すると、ASD児はその理解について知的な遅れがなくとも明らかに遅れがあり、Yes/No質問の応答に問題があると推定された。また同じYes/No質問であっても聞く内容によって成績に差が出ることも定型発達児の先行研究との比較からASD特有の特徴として推測された。多重ロジスティック回帰分析の結果からは、Yes/Noの質問に適切に応えるようになるための因子に、知的レベル、言語能力レベル、ASDの重症度のどの因子も関与しているがわかったと報告している。

以上のように、本論文は、これまであまり検討されていなかったYes/No質問の理解とASD児の知的レベル、言語能力レベル、ASDの重症度との関係を明らかにしたものであり、学位に値すると認められる。